［カートの世界大会に出場］

秋谷陸

Riku Akiya

頂点目指すドライバー サーキットを駆ける

あきや・りく
盛岡中央高校１年
温泉郷

カートの世界一を決める「CIK―FIA世界カート選手権」は11月10日から13日までの４日間、三重県・鈴鹿サーキット（1周1264㍍）で開かれた。

同選手権の併催レース「アジアパシフィック選手権」（ＫＦ２クラス）に、盛岡中央高１年の秋谷陸君が出場した。県内はおろか、北東北３県の選手で出場権を獲得したのは初めてのことだ。

秋谷君がカートを始めたのは４歳のとき。平成12年に父・弘之さんが「八幡平サーキットサンマリノグランプリ」（松尾寄木）をオープンさせたとき、カートに載せてもらったのがきっかけだった。「休日はいつもサーキットで走り込んでいた」と語る秋谷君は練習を重ね、技術を磨いていった。タイムも早くなり、カートの楽しさを覚えていった。６年ほど前からは本格的なレースにも参戦。ステップアップすることで、カートの魅力に引き込まれていった。

今回の世界大会は本来、５月に開催される予定だったが、震災の影響で延期された。８月に参戦に必要なカート国際Ｂライセンスを取得した秋谷君は、大会出場のチャンスをつかむことができた。

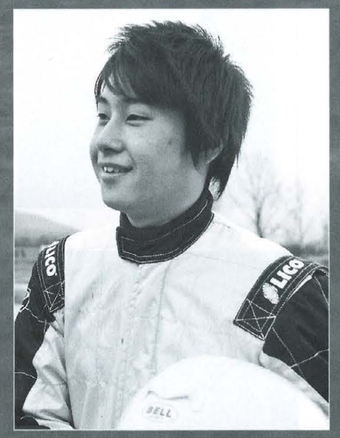
そして臨んだ選手権本番。12日のタイムトライアル（ＱＰ）で秋谷君は出場31台中最下位（タイム＝50秒793）と出遅れてしまう。実は、ＫＦ２クラスのエンジンやタイヤは鈴鹿に来てから初めて使って運転しただけの「ぶっつけ本番」だった。

「今までのマシンとは全くの別物。排気量が大きく（時速最高140㌔）、グリップ力の強いタイヤに体が対応できていなかった」と秋谷君は語る。

それでも、レースが進むにつれて、マシンやコースに慣れていくと、徐々に自分の力を発揮していく。予選（ＱＨ）で、29位に順位を上げると、翌日の準決勝（ＰＦ）では、他の選手のタイムが伸びない中、秋谷君はベストラップ49秒526を叩き出し、23位まで浮上する。しかし決勝でスタートがやり直しとなり、再スタート直後の第２コーナーで、後続車に追突されスピン。エンジンは再始動することなく、無念のリタイヤでレースを終えた。

「初めての大きな大会で緊張したが、もう少し上位を狙えた」と悔しさをにじませながら「世界を肌で感じるいい経験ができた。100分の1を争うレースでは、一つのミスが結果を左右する。もっと上に行くには、マシンを乗りこなす技術とそれを支える体力や集中力が必要」と秋谷君。

まずは、ＫＦ２クラスのレースで結果を出し、国際Ａライセンス取得を目指す。「一つ一つステップアップしていけばＦ１という夢も見えてくるはず」。来年の選手権は５月に予定されている。１秒でも速く―。秋谷君の挑戦は始まったばかりだ。



profile

平成７年旧松尾村生まれ。４歳のときに父・弘之さんの経営する八幡平サーキットサンマリノグランプリでカートを始める。盛岡中央高校では、自動車工学科で自動車の専門的な知識を学ぶ。尊敬する人はＦ１レーサーのアイルトン・セナ（故人）。身長165㌢。血液型ＡＢ型のしし座。柏台小→松尾中卒。16歳。

●CIK-FIA世界カート選手権

ＦＩＡ（国際自動車連盟）の下部組織ＣＩＫ（国際カート委員会）主催のレーシングカートの世界選手権シリーズ（ＫＦ１クラス）。1964年（昭和39年）イタリア・ローマで初めて開催された。レーシングカートの世界最高峰のタイトルとともに、過去の優勝者には後にＦ１ドライバーとなる人も名を連ねることから、Ｆ１をはじめとするモータースポーツを目指すドライバーの登龍門といわれている。

［全国都道府県対抗中学バレーボール大会県選抜に選出］

伊藤なのは

いとう・なのは　西根中３年　薬師

Nanoha Itou

中学生活最後の大会 全国の舞台で活躍誓う

名前を呼ばれたときは、うれしくて涙が出そうでした。全国の舞台に立てるめったにないチャンス。県の代表というプレッシャーはありますが、これまで教えてくれた人たちや両親、選考会合宿のときから一緒に頑張ってきた仲間のためにも、コート上で元気なプレーを見せたいです―。

12月25日から28日まで大阪府で開かれる「JOCジュニアオリンピックカップ第25回全国都道府県対抗中学バレーボール大会」に出場する岩手県選抜チーム12人に選ばれた。西根中からは昨年の小澤みなみさん（現盛岡市立高１年）に続く２年連続の選出だ。

伊藤さんとバレーボールとの出会いは小学校１年生のとき。姉・のはらさんが入っていた田頭バレーボールスポーツ少年団に入ったのがきっかけだ。もともと体を動かすのが好きだったこともあり、練習を積み重ねるうちにうまくなっていくのが楽しくてしょうがなかった。その気持ちは今でも変わらない。

高校のバレーボール強豪校に進むのを目標に掲げ、西根中バレー部に入部。この年コーチに就任した三田永旬さんの厳しい指導のもと、毎日練習に明け暮れた。技術以上に「周りの人たちへ感謝の気持ちや謙虚な姿勢を持つこと」を学んだ。そして、自分だけの考えや行動ではチームはまとまらないことから、常に「仲間を大事にして、考えながらプレーすること」が大切だということを実感したという。

伊藤さんは、１年生のときからレギュラーとして試合に出場。２年生のときには東北大会出場に貢献したが「３年生のときに自分が不調でチームも県大会ベスト16で終わったのが悔しかったです」と振り返る。

選抜チームは現在、平日は週２回、内陸組と沿岸組のメンバーで分かれて集まり練習しているほか、土日は、チーム練習や県外遠征などを行っている。伊藤さん自身「元気なプレーが持ち味」と話す通り、小川悟史監督（北上市立飯豊中教）から「プレーなでチームを引っ張っていってもらいたい選手」と期待されている。

「チームは全国制覇を目指していますが、全国のレベルは高いので、１戦１戦を大切にして、とにかく勝ちたい」。震災後、大船渡の避難所などでボランティア活動を行い「復興のために小さなことからできることをしたいと思いました。私たちのプレーで被災地の皆さんに元気を与えることができれば」と伊藤さん。

「バレーボールをしていない自分は自分じゃない。高校でもバレーを続け、春高バレーに出場したいです」と夢は広がる。大阪の地で、伊藤さんの活躍がチームを勝利に導くに違いない。

profile

小学校１年生から田頭バレーボールスポーツ少年団でバレーを始める。ポジションはセンター（県選抜チームではレフト）。西根中女子バレー部では、１年生からレギュラーで、２年生のときには、学校初となる東北大会に出場した。好きな選手はバレーボール女子日本代表の新鍋理沙（Ｖ・プレミアリーグ久光製薬スプリングス）。尊敬する人は三田永旬同校女子バレー部コーチ。身長168㌢。血液型Ａ型のふたご座。15歳。

●JOCジュニアオリンピックカップ　全国都道府県対抗中学バレーボール大会

毎年12月下旬から４日間、大阪府で開催される中学生のバレーボール全国大会。中学生バレーボールのレベルアップとともに、将来のオリンピック選手の発掘を目的に開催されている。ほかの大会にはない大きな特徴として、長身選手（男子180㌢以上、女子170㌢以上）を常時２人以上出場させることが競技規則で定められている。